昭和51年5月9日第三種郵便物認可　昭和56年3月1日発行（毎月一回発行）　ISSN 0385-5457

HIMALAYA

ヒマラヤ 112

● 特集　ヒマラヤの野生動物

1981 MAR

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN——HAJ

1982年ヒマラヤ登山学校隊員募集

―――クン（7,077 m）―――

1980年登山学校は、20名中19名がケダルナート・ドーム（6,831m）に登頂するという成果をあげて帰国しました（本誌109号既報）。隊員の中にはすでにヒマラヤ、アンデス、アラスカ等における高所登山経験者から、国内の冬山すら未経験という人にいたるまで幅広い層が参加していました。ＨＡＪでは経験豊富なインストラクターのもとに、正しいセオリーにのっとった安全確実な高所登山を指導しております。隊員はすべて、装備・食糧・梱包・輸送・渉外等の具体的な準備実務にも参画していただき、また国内での強化合宿も行なうなど、ヒマラヤ遠征全般について体得することができます。次回には自ら遠征を行なえる人材を養成することが、この登山学校の主眼となっております。実際に、卒業生の中には自ら隊長となって隊を組織し、成功をおさめて帰ってくる意欲的な人もでてきております。

1982年度はカシミール・ヒマラヤの秀峰クン（7,077m）にて実施する予定でおります。ふるって御参加下さい。

実施要項

目　的　①クン（7,077m）登頂
②高所登山の基礎修得

時　期　1982年7月末～8月末

負担金　69万円（航空運賃の変動等により変ることもあります）

定　員　20名（申込順）
インストラクター4名（医師含む）

申込み　1981年11月末までに下記宛に申込むこと（資料を送ります）
〒160 東京都新宿区高田馬場 3-23-1
淀橋食料ビル506　日本ヒマラヤ協会

この登山隊の旅行手続は、㈱西遊旅行が担当します。旅行業代理店業1976号

表紙写真

ハイローコー谷（南面）からの貢嘎山（ミニャ・コンガ7,566m、左奥）と無名峰（6,136m、右手前）。左の稜線はショイナードらのアメリカ隊が敗退した南稜で、右手の北東稜に本年北海道岳連隊が挑戦する。初登ルートの北西稜は裏側になる。　提供：京極紘一

ヒマラヤ No.112

1. ヒマラヤ放談 ―― 水野　勉

4. ヒマラヤニュース＜地域・トピックス・インフォメーション・新刊＞

9. 特集　ヒマラヤの野生動物
概説・神々の座に住む動物たち＜編集部＞　ヒマラヤを越える渡り鳥＜八木原圀明＞，イエティの足跡＜八嶋寛＞，ガルワールの野性羊＜稲田定重＞

18. 連載　ヒマラヤ閑話㊲ ―― 水野　勉

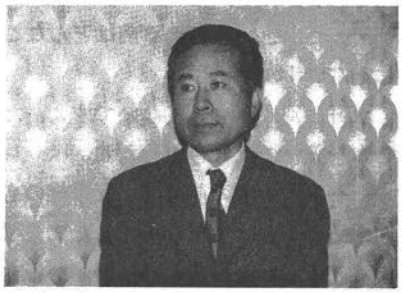
20. トレッキング許可で登れる山⑥＜クスム・カングル＞　金沢　健

23. 寸感・事務局日誌

※遠征学入門は今月号に限り休載させていただきます。

ヒマラヤ放談

登山とは、すなわち「山へ行って生活し、そして登ること」である。生活しないで登ることはできない。場所がヒマラヤともなれば、いきおい「生活」のファクターが大きくなる。他のスポーツと違って、登山行為そのものの中に非常な人間臭さが加わる所以である。そして常に観客が不在ともなれば、山書――山の書物が世に出る道理であろう。ヒマラヤに関する書物は、今や洋の東西を問わず膨大な数量にのぼる。今月は、日本山書の会代表であり、本誌の「ヒマラヤ閑話」に毎号健筆をふるっている水野勉氏に御登場願い、「ヒマラヤの書と人」について語ってもらうことにした。



水野 勉

●川崎隆章氏にすすめられて

―― 先生も昔は机上研究だけじゃなくて、実際に山歩きをしてらしたんでしょ？

水野 山歩きぐらいなら今でもしてますよ(笑)。

―― あ、これはどうも(笑)。

水野 この前は仲間と道志山塊を歩いてきた。昔から人のいないヤブ山が好きでしたね。

―― 御出身はどちらですか？

水野 福島です。だから南会津の山なんかよく歩きましたよ。当時のことですから山の様子も今とはぜんぜん違って、登山道などというものはなかった。ナタメをつけながら歩いたもんです。で、当時私らがつけたトレースのあとが、今登山コースになっていたりしてね。

―― 冬山や岩登りもされたんですか？

水野 岩はあまり興味がなかったけど、冬山には行きましたよ。東京に出てきてから職場で山岳部を作ったりしてね。これも冬山が目的でした。穂高にも通いました。だけどサンガクブなんて名前つけたのがまずかったなあ。もう少しハイカラな名前にすればよかった(笑)。

―― グループ・ド・ナントカとか(笑)。

水野 そうそう(笑)。

―― いつ頃のことですか？

水野 1950年代の中頃ですよ。

―― はあー、そんな昔ですか。じゃあ8,000メートルの初登頂時代ですね。

水野 そうです。で、私たちも山岳部と名づけた以上は多少本格的なこともしなきゃいけないと思ってね。冬山をずーっとやってればヒマラヤに行きつくわけですよ。でも外貨もとれない時代だし、行きたくても行けない。やっとマナスルが終って京大がカラコルムに手を出し始めた頃のことですから。

―― 大学は学術で外貨がとれたからよかった。

水野 私らじゃどうしようもないしね。でも何もしないでいるわけにもいかないという思いがあった。幸い多少語学ができたからヒヤラヤの文献を漁りはじめたんです。どうせやるなら原書を読破しなきゃ、ということで翻訳など始めてみたら、これがおもしろいんですよ。

―― それで、のめり込んでいったんですね。

水野 ええ、当時、山溪に川崎隆章って方がいました。

―― この前亡くなられた……。

水野 彼がその翻訳したものを書け書けって勧めるんです。ちょうど岩雪が創刊された頃でね。その岩雪にスタインメッツのアンナプルナⅣを書いたりしました。Ⅳ峰以外にもカングルーとかあの辺の山をワァーッと登った時の記録です。あと中国の山の紹介を書いたりしたなあ。当時の中国はまだ文革前で、一応雪解けムードだった。で、地理学報とか地理知識なんていうのが中国で出ていて、この前来日した史占春も書いてました。私もそんなのを取り寄せては訳していました。当時

は中国の山の研究をする人っていなかったですから、おそらく私が最初だったんじゃないかな。

●人物は作品で判断する

―― 山を始められる前はどんなことをしてらしたんですか？

水野　別に何もしてないですよ。ただ若い頃から本を読むのは好きでしたね。

―― 山の本の前はどんな系統のものを？

水野　一応は文学青年でしたよ(笑)。英文学をよく読みました。あと経済の本が好きでしたね。だから山を始めたら、すんなり海外の山の本に興味を持つようになったんです。

―― 山の書物っていうのは単なる実践の代替行為じゃないんですよね。それ自体が大きな目標になるんですね。

水野　そう。で、そういう連中が集って「日本山書の会」ができて……。

―― あれは斎藤一男さんが主催して始められたんですね。

水野　斎藤さんと小野さんと川崎隆章さんの三人ですね。私はその頃斎藤さんも小野さんも知らなかったんだけど、川崎さんとずーっとつきあいがあって、それで参加するようになった。ただあの山書の会っていうのは、日本の山の本が主でね。ヒマラヤとか海外の書物を読み漁るような人はいない。しかもコレクターが多いんです。海外の文献を漁ってるのは私だけですね。

―― そのような活動をしていて、海外の登山家たちとの交流ができたりとかいったようなことで、何かエピソードがありましたら……。

水野　それは私の場合殆んどないです。あまりつきあいをしませんから。人物の評伝を書くような場合でも書物をとおしてしか見ようとしないし、見たいとも思わない。ひとつには、つきあってしまうと書けなくなるということがある。

―― なるほど。確かに第三者的に見るためには弊害になりますね。

水野　それとね、私の書くのは厳密に云うと人物評論じゃないんです。人物を書くということをしませんから。私の書くのは、人物の思想の評論なんです。常に体系化された思想をとおして人物を見ようとするわけです。人間っていうのは、つきあって話をして眼の色を見ていればすべてがわかるというものじゃないという気がする。結局のところ思想というのは書物しかないと思うんだな。体系化された思想というのは……。

―― 常に文章をとおして人を見るわけですね。

水野　文章じゃなくても、絵でも音楽でもなんでもいい。その人間の美意識……「俺はこれを美しいと思う」というような、そういうものをとおして表現されて、できあがったものが常に問題になるわけです。

―― でも、その美意識や思想の下地には、やはりその人間の生活があるんじゃないですか。誰と喧嘩したとか、誰を尊敬していたとか、誰に恋をしたとか、そういうことが下地になって……。

水野　それはもちろんそうですね。でもそれは私の分野じゃないんです。私にとっては表現以前の問題は「まあ、いいじゃないか」ということなんです。だから最初に云ったように私は人物評論は書かないんです。人物の思想の評論なんです。

―― つまり経過じゃないんですね。常に結果としてできあがったものを見るわけですね。

水野　そういうことです。以前、近藤信行さんが小島烏水伝を書いてますが、ああいうものには興味がないんです。

●日本人では今西錦司

水野　ただね、ひとつおもしろい手紙を持ってるんです。ティルマンがベイリィに書いた手紙ですがね。ナムチャバルワに行きたいということが書いてあって、それであの周辺のことをいろいろと問いあわせているんです。

―― いつ頃の手紙ですか？

水野　戦後すぐの頃で、カシュガルへ行く前です。結局、ナムチャバルワには行かなかったんだけど、行こうとして準備していたのは確かなわけです。こんなことはどの本にも書いてないし、二人とも死んじゃったから、今となってはこの手紙でしかわからない。まあ、私のテーマとは関係ないんだけど、でもティルマンっていう人は好きなもんだから……。

―― どうして手に入れたんですか？

水野　私の持っているヒマラヤンジャーナルは、ベイリィが持っていたものなんです。で、その中の一冊にティルマンからの手紙が挟んであったんです。

――　おもしろいこともあるもんですね。ところでクラッシックになった山の本とか、それを書いた探検家や登山家を、今評価するとしたら、どのあたりをあげられますか？

水野　日本では今西錦司さんですね。山の本じゃないんだけど、戦前のもので「生物の世界」というのがあります。学問とエッセイの中間ぐらいの本なんだけど、これは好きです。宇宙的な視野で捉えてるんです。宇宙的な物の見方というのは、私の好みですよ。昔、司馬遷をよく読んだのもそのせいです。まあ、日本の山の世界では今西さんですね。

――　そういえば、学研の地図集成のカラコルム編の中で、今西さんについて書かれてますね。

水野　書いたことは書いたけど、編集者がどういう意図で書かせたのか、今もってわからない。あれは云ってみれば、カラコルムの探検家の列伝でしょ。今西錦司をその中に入れるなんてメチャクチャだよ。

――　確かに世界のカラコルム探検史の中では位置づけようがないですね。

水野　まったく位置づけようがない。今西さんはカラコルムの探検なんかしてないですよ。日本人の中での先駆者ではありますがね。

――　まあ、日本語で書かれた本だから、日本人向けに一人ぐらい入れておかなきゃ……ということなんじゃないですか(笑)。

水野　そういうことになるかな(笑)。他に入れようがないからな。

●クルツは抜群に正確

――　外国人で特に誰かをあげるとすれば？

水野　やはりティルマンですね。彼の文章のあの皮肉っぽいところがすごくおもしろい。今西錦司とティルマンには非常に影響を受けています。あとシプトンとかスマイスとか……。

――　英国の人がお好きなんですね。

水野　そうですね。まあドイツ語もフランス語もできますから、いろいろと読んではいますが、あまり馴染めない。特にラテン系の人の本はよくわからない。ドイツのものは嫌いではないです。最初に訳したのがスタインメッツでしたし。ドイツ語で書かれた文章は若々しくていいです。バウアーなんかいいなあ。

――　ああ、パウル・バウアー。私も憧れました。1930年代のドイツのヒマラヤ登山っていいですね。ナンガパルバットやカンチェンジュンガに対するあの果敢な攻撃精神には、英国の主流派の山登りとはまた違う魅力がありますね。

水野　そうだね。文章はあまりうまいとは思わないけど、あの若々しさはすばらしい。ただ、戦後のフランスのレビュファとか、ああいうのはどうも好きになれない。

――　ラテン系の文章というのは、華やかだし、ドラマチックですよね。特にエルゾーグなんか小説のようにおもしろい。ただ、ああいう書き方っていうのは英国の伝統にはないんですね。

水野　渋いよね。たんたんとしていて、そんな中に深い洞察や分析がある。ただフランスの人で一人だけ好きな人がいるんです。

――　誰ですか？

水野　マルセル・クルツ。この人のは非常に正確なんです。彼のやった取材とか調査っていうのはものすごいですよ。

――　「ヒマラヤ編年誌」ですね。あれも先生の訳でした。

水野　もうメイスンなんかとはぜんぜん違う。

――　よくディーレンフルト、メイスン、クルツと三人がとりあげられるようですが、先生はこの三人をどのようにお考えになります？

水野　メイスンはどちらかというと、登山以前の古い探検史が主ですね。彼自身もともと登山家じゃなくて、測量家ですからね。だからそういった点からはよくヒマラヤを捉えている。でも、山のことはたいしてわかっちゃいない。

――　山はディーレンフルトのほうがよくやってますね。

水野　そうだね。ただあの人はちょっと雑な人だったように思う。山の登り方も雑だし、書いた本も雑です。

―― なるほど。そういえば息子のアメリカ国籍になったディーレンファースも雑な感じがしますね。

水野　うん。あちこちの国からテキトウに人を集めてきてはテキトウな山登りをする。やっぱり親子ということかな(笑)。

―― 去年の春、ヤルン氷河でヘルリヒコッファーに会って、少し話もしたんですが、あの人もそういうタイプですね。

水野　そうだね。いつも何となくすっきりしない登山が多いし、はっきり云って業績らしい業績ってないですよね。ナンガパルバットにしたって、ヘルマン・ブールの力によるものであって、ヘルリヒコッファーの功績じゃないですよね。

―― 去年カトマンズで聞いた話ですがね。あの爺さん、先に山を降りてきて、あとのことは放ったらかして帰国しちゃったらしいんですよ。それで、あとから下山してきた若い隊員はカトマンズのホテル代も払えなくて、えらく困ってるんですよ。当然現地滞在費も含めたうえで、個人負担金を徴収してやって来ているのに、ひどい話です。例によって4カ国ぐらいの混成部隊で、どちらかというとまとまりのない隊でしたがね。

●「ヒマラヤの高峰」は日本人向き

―― 深田久弥さんを今ヒマラヤ研究家として歴史的に評価するとしたら、どういうことになりましょうか。亡くなってちょうど10年になりますが……。

水野　うーん。ちょっと身近すぎて評価しにくいんだけど、あの「ヒマラヤの高峰」っていうのは、メイスンやクルツとはぜんぜん違うんだなあ。客観的じゃないんです。深田さんの個性をとおして見たヒマラヤなんですね。あれ読んで研究書という感じがしないでしょ。

―― そうですね。エッセイの集りみたいな感じですね。

水野　だから、ざっと読むには一番読みやすいし、読んでおもしろい。それに小さな山まで扱っているから、非常に便利でもある。この点はメイスンやクルツを凌いでいるね。ただ外国の人に読める本じゃないんですよ。メイスンやクルツは我々日本人でも読めるけど「ヒマラヤの高峰」はイギリス人やフランス人には読めない。

―― と、おっしゃいますと？

水野　日本の登山界の人じゃなきゃわからない部分がいっぱいあるんですよ。特にプロローグの部分でね。

―― ああ、「昨夜○○君が拙宅に見えて云々……」といったようなやつですね。

水野　そうそう。我々にはおもしろいけど、外国人には何のことかわからない。しかし、やはりすばらしい本ではあるけどね。

―― 日本登山界には大きく貢献した本ですよね。では、そろそろ紙面もなくなりますので……。ありがとうございました。

（インタビュー構成　角田不二）

年報「ヒマラヤ'80」の送付について

大変遅くなりましたが、HAJ年報「HIMALAYA1980年版」ができあがりましたので、HAJ会員で55年度会費を完納されている方には無料で送付致します。なお、未納の方には納入のあるまで送付を見送らせていただきますので、御了承願います。非会員で購入御希望の方は、定価2,000円及び送料300円を添えて事務局まで申し込み下さい。

なお、現在のHAJの財政能力では、毎月の機関誌と会員名簿に加えて年報までも無料送付することは非常な困難がともない、赤字財政となることを覚悟せねばなりません。そこで、今年度はとりあえず無料で送付致しますが、来年度よりしばらくの間、御希望の会員の方には定価の半額を負担していただくシステムとする予定でおります。よろしく御了承のほどお願い致します。

トピックス

カンチ隊壮行会開催さる

さる1月29日（木）午後7時より、東京池袋の東方会館「芙蓉の間」にて、ＨＡＪ主催の日本カンチェンジュンガ遠征隊の壮行会が開催された。今年度のイベントのひとつでもある大遠征隊だけに162名という多勢の出席を得て、盛大に催された。

まずHAJを代表して会長の柴田金之助からあいさつがあり、つづいて(社)日本山岳協会副会長の丹部節雄氏から「世界で初めての試みをぜひ成功させて下さい」との祝辞が送られた。そのあと、当協会専務理事の稲田定重から5年前の発案から今日までの経過が報告され、山森欣一隊長のあいさつ、隊員紹介とつづいた。乾杯の音頭は東京都山岳連盟顧問の遠藤登氏。

なごやかなムードのなかで、昨年カンチェンジュンガ主峰に北面から無酸素登頂を成功させた山学同志会の小西政継氏、一昨年ダウラギリⅡ～Ⅲ～Ⅴと長大な縦走を成功させたカモシカ同人の高橋（今井）通子さんのお二人から激励の言葉が送られた。会場はそのまま賑やかな歓談の場となり、最後に隊実行委員長の清水澄が閉会の辞を述べて、午後9時過ぎに散会となった。

隊はすでに3名をカトマンズに送り込んでいるが、このあと2月1日に4名、11日に5名、14日に8名と成田から出発していくことになっている。

インフォメーション

ヒマラヤ集会予告

≪名古屋≫

- 期日　2月22日(日)　14:00～18:00
- 内容　ヒマラヤの古地図について（堀内立三）
  メルー峰登山報告（石原俊洋）
  インドの旅（インド政府観光局）

≪水　戸≫

- 期日　3月1日(日)　10:00～16:30
- 内容　ヒマラヤ各地域事情（伊丹紹泰、稲田定重）
  ブータンヒマラヤについて（森田千里）
  インドの旅（インド政府観光局）

≪秋　田≫

- 期日　3月29日(日)　10:00～16:30
- 内容　ヒマラヤ各地域事情（稲田定重）
  カラコルム登山の課題（土居正勝）
  短期速攻登山の戦略と高所順応（西郡光昭）

※プログラム、講師は都合により変更される場合があります。

インドヒマラヤ登頂報告会

昨年プレ・モンスーンにパンワリ・ドワル(6,663m)、ポストにヴァスキ・パルバット（6,792m）と、つ

「ヒマラヤ」表紙写真募集

「ヒマラヤ」表紙の写真は会員の皆様より広募したものを、毎月一作づつ掲載する予定でおります。ふるって御応募下さい。採用分には全国共通図書券を差しあげます。

≪規　定≫

(1)モノクロでキャビネ判以上であること。
(2)被写体は広義に解釈したヒマラヤ地域のものであること。
(3)未発表であること。
(4)なるべくあまり知られていない角度からの写真、あるいは未知の地域の写真を期待します。雑誌、広告等で頻繁に見うけられるような写真（例：カラパタからのエベレスト）などは御遠慮下さい。

≪送り先≫

〒160 東京都新宿区高田馬場 3-23-1
淀橋食糧ビル506号
ＨＡＪ「ヒマラヤ」編集部

づけて二峰に初登頂した立命館大学山岳会ガルワール・ヒマラヤ登山隊の中江啓介隊長を囲んで、その報告会が開催されます。

◇日時　2月28日(土) 午後6時30分～9時
◇場所　京都府農協会館6階604号室
　　京都駅八条口より南へ徒歩5分
　　TEL　075-681-4331
◇主催　京都府山岳連盟海外委員会
◇内容　・登山報告（スライド上映）
　　・最新情報 ── いかに安く行くか
◇問合せ　07745-3-4175（内田嘉弘）
※入場無料

スワルガロヒニをやってみませんか？
～ＨＡＪで許可取得～

ＨＡＪでは本年7～8月にかけて、ガルワールヒマラヤのスワルガロヒニ峰（6,252m）の登山許可を取得している。同峰はスルグナリンとも呼ばれ、バギラティ川をはさんでガンゴトリ山群の北西に位置している。標高こそ低いものの、非常に未知な山域で、過去の記録としては1974年にカナダ隊（クラーク隊長）が入山したのみである。同隊は西峰（6,247m）に登っているが、主峰（東峰）は今もって未踏である。

協会では同峰を自主的に実践してみようという方を募っております。登山ルート、方法、隊の運営等に関しては一切お任せ致しますが、万一の場合も含めてすべての責任を当事者で負っていただくことが条件です。　御希望の方は事務局（03−367−8521）まで御一報を！

新刊図書一覧

①遠藤太禅、「ビルマ蜻蛉」、しもつけ書房、1979•8、364p、〔奥付に定価表示無〕、（同書房＝栃木県宇都宮市北一の沢11-9）。

②井上靖・岩村忍、「西域 ── 人物と歴史 ──」、社会思想社、1980•12、242p、400円、（現代教養文庫1036。1963年筑摩書房版 ── グリーンベルトシリーズ15 ── の同名書の再版、写真が数葉附加されている）。

③植村直己、「冒険」、毎日新聞社、1980•12、253p、960円。

④菅原篤、「星の国・砂の国 ── イスラムのこころのスケッチ ──」、毎日新聞社、1980•12、226p、980円。

⑤角山栄、「茶の世界史 ── 緑茶の文化と紅茶の社会 ──」、中央公論社、1980•12、225p、440円、（中公新書596）。

⑥オールダス・ハクスレー著／片桐ユズル・訳、「島」、人文書院、1980•12、340p、2,000円。

⑦胡光舟、「呉承恩和西遊記」、上海（中国）、上海古籍出版社、1980•7、140p、0.34元＝210円、（中国語版。「中国古典文学基本知識叢書」、初版15万部）。

⑧秋浦等、「鄂温克人的原始社会形態」、北京（中国）、中華書局、1962•2（初版）、1980•3（二版）、135p、0.66元＝400円、（中国語版。二版4,500部）。

⑨陳舜臣・ＮＨＫ取材班、「天山南路の旅 ── トルファンからクチャへ ──」、日本放送出版協会、1981•1、269p、1,700円、（シルクロード・絲綢之路・第五巻）。

⑩林茂雄、「アフガン・ゲリラ ── イスラム解放区潜入記」、東京新聞出版局、1981•1、221p、980円。

⑪Ｕ・バドニス／Ｉ・マラニ／鳥居千代香・訳、「世界の女性 ── 幻影と現実 ──」、家政教育社、376p、2,500円、（著者はインド人）。

⑫ ── 、「季刊・知識　21号 ──（特集・シルクロードのすべて）」、文化総合出版、750円。

⑬相馬隆、「パルティア見聞録 ── シルクロードの古代文化吟遊 ──」、東京新聞出版局、1981•1、240p、1,300円、（オリエント叢書）。

⑭小倉貞男・文／宮川陸男・写真、「アンコール・ワットへの道 ── いまカンボジアは ──」、読売新聞社、1980•12、158p、1,800円。

⑮中村尚司、「地域と共同体」、春秋社、1980•12、249p、1,300円、（春秋選書。インド及びスリランカに関して）。

⑯Ｈ・Ｃ・ベラン／福田宏年・前島郁雄／訳、「ベランのパノラマ ── アルプスとヒマラヤの世

界 ── 」、実業之日本社、1980•12、118p＋別刷附録、23,000円。

⑰那谷敏郎／文・大村次郎／写真、「インドの黄金寺院 ── 聖域行・5 ── 」、平凡社、1981•1、144p、700円、（平凡社カラー新書139）。

⑱西堀栄三郎／編、「シンポジューム・ネパール ── 第7回・第8回ネパール研究会発表論文集 ── 」日本ネパール協会、1980•11、107p、2,000円。

⑲本多恵、「サーンキャ哲学の研究・上」、春秋社、1980•2、vi＋689p、8,500円。

⑳山本達郎先生古稀記念論叢編集委員会・編、「東南アジア・インドの社会と文化」、山川出版社、上巻＝1980•12、65＋505＋Vp、7,500円。下巻＝1980•12、5＋510＋iv、7,500円。

㉑山崎利男・安田信之／編、「アジア諸国の法制度」、アジア経済研究所、1980•3、360p、3,100円、（「経済協力調査資料」、第97号）。

㉒江上波夫・他編、「オリエントの曙光」、新潮社、1980•9、142p、2,800円、（「新潮古代美術館」、第一巻）。

㉓田村秀治・編、「詳解アラビア語 ── 日本語辞典」、(財)中東調査会・発行／ジャパン・パブリッシャーズ・発売、1980•8、V＋915p、8,000円。

㉔久保田博二、「久保田博二写真集 ── 大河の流れ ── 中国の風土と人間 ── 」、芸文社、1981•1、141p、4,800円。

㉕ツルティムケサン・小野田俊蔵／著、北村甫・星実千代／校閲、「現代チベット語教本」、国際仏教徒協会・発行／永田文昌堂・発売、1980•7、127p、2,000円。

㉖アーノルド・ラン編／春木千枝子・訳、「アルプスに挑んだ人々」、新樹社、1980•9、166p、2,500円。

㉗敦煌文物研究所・編、「敦煌的藝術寶蔵」、香港、文物出版社・三聯書店・連合書店、1980•10、カラー図版多数、H•K•＄200＝16,000円。

㉘調達先、「中国民間文学概論」、香港、商務印書館、1980•10、3＋489p、HK＄19＝1,520円、（「中国民間文学理論叢書之一」）。

㉙陳玮君・整理、「畲族民間故事」、杭州（浙江省）・中国、浙江人民出版社、1979•9、258p、0.93元＝560円、（中国語版40,000部）。

㉚雲南大学民族民間文学調査隊／李子賢・整理、「三只鸚哥傣族民間叙事長詩」、昆明（雲南省）・中国、雲南人民出版社、1980•2、68p、2角4分＝150円、（中国語版。初版4,000部）。

㉛千葉茂樹・著／依光隆・画、「マザーテレサこんにちわ」、女子パウロ会、1980•7、195p、900円、（子供向）。

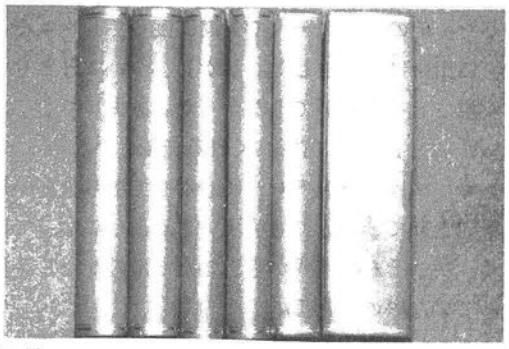
── 資料・藤井毅 ──

「ヒマラヤ」合本 ──── ヒマラヤの情報が満載

このほど「ヒマラヤ」の合本を製作致しました。今回は61～80号、81～100号の2分冊です。既刊の20～50号、41～60号も若干在庫があります。各冊ともその時代のヒマラヤの様々な話題や情報、またじっくり読める記事などが豊富に掲載され、永久保存版として最適です。

①20～50号　1971年 8月～1976年 1月
②41～60号　1975年 3月～1976年11月
③61～80号　1976年12月～1978年 7月
④81～100号 1978年 8月～1981年 2月

※①、②は各1部しか在庫がありません。申し込み順に〆切りますので、HAJ事務局までお早めに!!



※定価格8,000円。送料実費（まとめて請求書を同封しますので、到着後に振込んで下さい）

■ 新連載・ヒマラヤの報告書紹介

ハチンダール・キッシュ1978

山嶺登高会

本の紹介を書く前に、少し自分のことを書こう。勝手なハナシだが、しばしご容赦願いたい。

私はまったく無名の三流の山岳団体で育った人間である。が、いつの頃からか、むやみやたらと夢ばかりが大きくふくらむようになって、自分もしくは自分の所属する団体とのバランスがとれずに苦しんだ一時期がある。馬鹿げたことだが、山岳雑誌に頻繁に名前の出る団体に対して猛烈にコンプレックスを感じたことも少なくない。この報告書を出した団体に対してもである。何故なら、当時私の所属する団体は一度も雑誌に名前が載ったことがなかったから。

一般的には「ヒマラヤが大衆化した」とされる70年代中期になっても、とりまく環境の貧弱さのために、私はEXPEDITIONを行なうことができずにいた。それはたまらないくらいに悔しい時代だった。山岳雑誌の巻頭を飾るカラー写真、他団体の報告会で見る8ミリ、スライド、そして報告書等々……まったくそれらのものが心底バラ色に見えたのである。何度か実現しようと努力はした。そのために一人で長期に渡ってトレッキングに出かけたりもした。しかし、ついに自力では実現させることができなかった。あまりにも若かった。そして上に立ってくれる先輩もいなかった。

今、私は「他人のレールを借りて学ぶ」という経過を経て、自分でも実現できるようになっている。が、そんな時代から、まだほんの5年しかたっていないのである。

この報告書の主人公たちは、私よりも数年先を歩いており、国内の登攀でも私よりいくらか上等の記録を持っている。しかし、はっきり云うなら岳界における"一流"では決してない。そして、私と似たような歴史を何年か前に確実にたどっているのである。

そのような歴史の中にあって、仲間たちは何を考え、何を言い、何を為し、何を悩み、何を喜んだのか？　どのような紆余曲折があって、どのような苦労をしたのか？　そして、ある者は坐折し、ある者は高く舞いあがり、ある者は光り輝きながら死んでいった。

私は苦悩と喜びの入り混った自分の足跡を懐しく思い出しながら、それと対比させる形でこの本を読むことができた。そして、それを岳界全体の歴史の中にあてはめてみることは、さらに興味深いことであった。そうすることによって、他人の登山活動の記録も無味乾燥ではなくなってくるから不思議だ。

結局のところ、登山人生の初めの部分からバラ色の道を歩いた人間など、ほんのひとにぎりでしかあるまい。自らをその「ひとにぎり」に属さないと考える人は、おそらくこの本に対し、ある程度の興味を持つことと思う。

難を云うなら、レイアウトが今ひとつすっきりしないこと。カラーが鮮明でないこと。一カ所ページの乱れがあること。やや製本が悪く読みづらいことなどである。それらは内容の問題に比べたら二次的以下のことかもしれないが、書物の価値を判断するうえでは見逃せない部分である。その点だけが惜しまれる。　（ふ）

- B5判142ページ
- 頒価　2,300円
- 連絡先 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
  淀橋食糧ビル506
  日本ヒマラヤ協会内　山森欣一

特 集

ヒマラヤの野生動物

我々がトレッキングや登山に出かけて帰ってくると、土産話のなかに動物と出くわした話が一つや二つは必ず入っているものである。サルやカモシカの類が最も多いが、中にはヒョウが捕殺したアイスベックスを横どりして喰ってしまったなどという愉快な話もある。いずれにせよ野生動物はヒマラヤに行く者にとって、民俗や祭りなどとともに大いに興味をそそられる対象であろう。そこで今月は、少し趣向を変えて『ヒマラヤの野生動物』を特集してみた。

概説—神々の座に住む動物たち

編集部

動物区系地理学では、ヒマラヤの山岳地帯は旧北区(Palaearctic Region)と東洋区(Oriental Region)の境界線上に位置づけられている。しかし標高の高い山岳地帯は、その南面であれ北面であれ環境が近似しているため、両方の区系の動物をはっきりと分けられるものではない。また、ヒマラヤ山系には、ブラーマプートラ、ガンジス、インダス等、山脈を縦割にする大河川が走っているため、両方の動物系の交流の場ともなるわけである。

ヒマラヤの高所の動物は、寒冷と低圧という二つの悪条件を克服しなければならない。一般に動物は、その生息地域が寒冷になればなるほど手足が小さくなっていく傾向にあるが、ひとたび雪線を越えると、雪上での生活がしやすいようにと大きくなってくる。

ヒマラヤの野生動物は、我々が想像する以上に高所にあがり、たくましく生きている。野生ヤギは5,800mに達しても生きられるし、ヤクは時として6,000mを越える。人間の永住限界をはるかに越えた高地にも様々な生命が存在しているのである。5,000mの岩だらけの荒地でも、水の流れの中にはサンショオウオがいるし、ヤブや土壌の中には、ミミズ、ナメクジ、カタツムリ、カエルなどが生息している。そしてこれらを餌として生きるトカリネズミの姿も見られる。それではこれらの動物たちを種類別に追ってみることにしよう。紙面に限りがあるため、今回は特に哺乳類と鳥類に絞ってみた。

(1)哺乳類

ヤ　　ク

ヒマラヤといえば、まず眼につくのはこの動物である。が、見かけるのはほとんどが飼育されたヤクである。今では野生ヤクは激減してしまい、かろうじてパミール、カシミール等にわずかに生息している程度である。

もともと野生だったこの動物は、数千年前にはチベット高原を中心に大きな群を作って生息して

いた。大形動物の割には機敏で、強靱な体力を持っている。時として、驚いた時などに狂暴性を示すこともある。

家畜化されたヤクは年々増えつづけ、ヒマラヤ高地民の間で非常に多目的に飼育されている。

クマ科

クマ　ヒマラヤグマと呼ばれるものが広く分布しており、日本の月の輪グマと同じ種類である。主に樹林帯に住むが、雪線以上まで活動領域に入っている。

レッサーパンダ　ネパールから東部ヒマラヤにかけての3,600～5,200mぐらいまで生息している。夜行性で、肉食動物の歯ならびを持っていながら完全な草食動物。中国のジャイアントパンダとともに珍獣である。

サル

アカゲザルがアフガニスタンからビルマまで広く分布しているが、比較的東部ヒマラヤに多く生息している。常緑樹林帯に住むが、時として人家に近づき、農作物に被害をおよぼすこともある。

アッサムからビルマ北部にかけて分布するものにハヌマンラングールとブタオザルがある。前者は白い大型のサルである。

レイヨウ類

アイスベックス　山岳地帯では最も良く知られる動物で、半月状の立派な角を持っている。夏は20～30頭ほどの群を作り、冬になると200頭ほどの大群となる。主に中央アジア、西部ヒマラヤに生息している。

マーコール　野生ヤギの中では最大のもので、肩高90～110㎝、体重80～100㎏に達する。大きなねじれた角を持っている。主にヒンドゥークシュ山系に生息しているが、奥深い峡谷部にいるため、くわしい生態は知られていない。ハンターに追われ、最近数が減少してきている。

アジアムフロン　大きな角を持った野生羊で、アフガニスタン、パキスタン、カシミールの山岳地帯に生息する。主に森林帯に住むが、高所草原にも出没し、また低地に降りてくることもある。

ヒマラヤタール　これは東にかたよって分布している。シッキム、ネパール、ガルワールの森林地帯に生息しており、森林限界を越えることはない。雄は単独で生活し、雌は数頭の群を作る。

インドキョン　主に低山帯の森林に生息するが、詳しい生態はわかっていない。捕食者が近づくと驚告の吠え声を出す。

スマトラカモシカ（タテガミカモシカ）　ヒマラヤ全域に広く分布している。生息地帯が低いため、ヒョウ、オオカミなどに捕食されることが多い。

ヒマラヤゴラール　ビルマからカシミールまで分布している。標高3,000～4,000mの急な斜面に生息している。雄は単独、雌は子と一緒に10頭ほどの群をつくる。非常に機敏で、岩場の魔術師といわれる。

ネコ科

ユキヒョウ　ヒマラヤ山域では最もよく知られたネコ科の動物。毛皮が美しいために乱獲され、最近は非常に少なくなってきている。長い毛におおわれ、高山帯の雪線付近に生息する。夜行性で、レイヨウ類を捕食する。

ウンピョウ　ネパール、ビルマなどの低山岳地帯に生息する。樹上で待ちかまえて獲物を襲う。

トラ　ライオンとともに最も強大なこの猛獣は世界的に激減している。ライオンが群を作るのに対し、トラは単独行動をとること、子育てが不得手なこと、また非常に飼育しにくい性質のため、最近大流行のサファリパークなどでも扱うことができない。夜行性のため、有名なコーベット国立公園（デリーの北部にある）のジャングルなどに行ってもあまり見られない。生息地域は非常に広く、インド亜大陸からマレー半島、インドネシア、中国、朝鮮、南シベリアにまでおよんでいる。インドでは古くからベンガルトラと呼ばれて恐れられており、200人以上を喰い殺したキチガイトラの話などエピソードも多い。

イヌ科

オオカミ　荒地でも森林帯でも獲物さえあればどこにでも住みつき、広大な範囲を移動して歩く。

エベレスト山麓のパンボチエあたりでもオオカミによる家畜の被害があると聞く。

ドール　オオカミとキツネをまぜあわせたような体型をしており、インド、ビルマに分布する。主にレイヨウ類を捕食するが、時としてクマや水牛、はてはトラにまで襲いかかることがあるという。非常に狂暴で、食べるためだけでなく、遊びとして動物を殺す性質を持っている。

他にキタキツネなども生息している。

(2)鳥　類

ワシ・タカ類

ヒマラヤの空に最も多く、イヌワシ、ハイタカ、ツミ、ノスリ、シロガシラトビなどがよく見かけられる。ヒマラヤイヌワシは非常に大型で体重10kgにも達するものがある。

死肉や弱った動物をねらうハゲワシの類も多く、ヒゲワシ、クロハゲワシ、エジプトハゲワシなどが見られる。

キ　ジ　類

ネパールでは国鳥ダンフェンに代表される美しいニジキジが2,500～4,000mにかけて生息している。西パキスタンからビルマにいたるヒマラヤのほぼ全域でジュケイの仲間が多く見られる。ハイイロジュケイ、ヒオドジュケイ、ベニジュケイなどである。

カラス類

非常に適応力が強く、かなりの高所でも見られる。特にアルプスキハシガラスは5,500m以上の高所に営巣し、8,200mぐらいの高度まで飛びあがるといわれている。その他にもワタリガラス、ベニバシガラス、ホシガラス、ヒマラヤイワヒバリなども高所に生息する。5,000m前後で営巣するヒマラヤイワヒバリは冬期も高度を下げない。

(3)イエティ

様々な情報が得られているにもかかわらず、今だにその実体は詳かでない。現地民の話をまとめると以下の3種類に分けられるという。

ズーテー　大クマほどの巨大なもので、時に家畜のヤクを襲う。

メーテー　人間ほどの大きさで、低い声で吠え、主にナキウサギを食べる。

イエティ　人間よりも小さく猿ぐらいの大きさのもの。

他にデータを集めると、体つきは頑丈で、頭頂がとんがっており、類人猿に似た動物。全身を赤褐色が灰褐色の毛におおわれ、特に肩のあたりの毛が長い。前肢が長いが、2本足で歩き、岩を持ちあげたりする怪力がある。といったようなことになる。人によっては、あれはクマだとかランールだとか、いやユキヒョウだとかさまざま。

しかし、研究者の中には、キガントピテクススという化石類人猿（ピテカントロプスや北京原人よりも古い）の生き残りか、もしくはそれに近いものではないかという人もいる。キガントピテクスは中国南部で化石が発掘されており、下あごの大きさから判断すると、身長270cm、体重270kgにもなる考古学史上最大の類人猿である。

いずれにせよはっきりしていることは、多くの登山者やトレッカーによって、あきらかに人間のものとは異質な2本足の足跡が雪の上で認められていることである。したがって雪線以上で活動していることは確かであるが、雪上では食物が得られないことからして、普段は高所草原や亜高山帯のシャクナゲ林、針葉樹林帯に生息する何らかの哺乳動物ということになろう。

ネス湖の怪獣と並ぶ現代のロマンであることには間違いなく、ヒマラヤの興味尽きない話題のひとつでもある。　（文責：角田）

—・—・—・—・—・—・—・—・—

★執筆にあたり下記の図書を参考にしました。

「動物地理学」ウィルマ・ジョージ著　吉田敏治訳　古今書院

「世界の動物事典」小原秀雄監修　三省堂

「朝日小事典 ── ヒマラヤ」川喜田二郎編　朝日新聞社

「世界山岳百科事典」山と溪谷社

ヒマラヤを越える渡り鳥

八木原　圀明

渡り鳥の思い出は、良いこと半分、悲しいこと半分である。良い思い出が半分あっても、残念ながら手放しで楽しかった、とはどうも云えそうにない。やはり登っている時は苦しさの連続であった。

一度は1975年の10月である。ダウラギリⅣ峰の南面、ルートはミャンディー・コーラの支流のコーナボン・コーラからの「グルジャ・ヒマール南東稜」である。その登山隊には1971年春と1972年春の経験者3名も入っていた。そのためもあってか、秋のシーズンゆえかルート工作は順調に進み、前2回では1ケ月近くもかかって達したミャグディー・マータへ10日間も早く到達することが出来た。

その後の10日間は計画通り、ミャグディー・マータ近くに建設する予定のC4地点への荷上を兼ねた高所順応期間にあてた。そしていよいよC4を明日建設して後半戦に突入しようという時、クリス・ボニントン率いるイギリス隊が9月24日に懸案の南西壁からエベレスト登頂に成功したというニュースが入った。

我々は云うべき言葉を持たなかった。何と云ってもまだ9月である。それがあの大部隊をして、B•Cを建設してから33日目というから、恐るべき驚異のスピード登山であった。全隊員ガックリ、という感じでニュースを聞いたものであった。

ミャグディー・マータの向う側に建設したC4からコーナボン・コーラの内院へ下り込むルートが発見出来ずに4日ほどが過ぎた。天候はモンスーン最後のあがきとも思われる悪天である。新雪が1m以上にもなり、ルート偵察中に尾根上の雪が落ち、危うく一緒に転落しそうになり、動き始めた雪の上をいざって、尾根の反対側に手を掛けて助かる、というウソのような一幕にも出くわしたりした。

翌日の10月1日に昼間ほんの少し小雪がちらついただけで、それから登頂して撤収までの約20日間というもの、C4以上では雪が全く降らない、という驚くべき天候の変りようであった。とは云っても、それより下のC3やC2ではテントがつぶされるほどの降雪が毎日続いていた。

C7が建設された10月10日、登山開始以来初めて、山にちょっと強い風が朝から吹いた。フィックスロープは凍ってユマールはきかず、降雪がしばらくなかったこともあり、足下の雪は相当に硬くなり、ステップにアイゼンが完全にささらない程になった。

渡り鳥が飛ぶのはこの日初めて確認された。C4にいたシェルパの「サーブ、メニメニバードツァー」という大声に呼ばれて空をながめると、たくさんの鳥がダウラギリⅣ峰とⅤ峰の中間にあるコル（7,316m）を越えて、コーナボン・コーラの内院の上をミャグディー・マータの裏側を通って南へ飛んで行ったらしい。気温がグンと下がったことやちょっと強い風が吹いたことに少しは関係があるのだろうか？

渡り鳥ではないが、鳥の話はその１週間後にもあった。Ｃ８とＣ９（アタックキャンプ）用の食糧などをＣ８を建設するウェスト・コル（約6,900ｍ）へ荷上げに向った。しかし、初めて体験する高度でもあり、到達することが出来ず、コル直下に雪穴を掘り、荷物をデポしてＣ７へ下ってしまった。

その翌々日、Ｃ８建設のために再び登ってみると、心配した通り全ての食糧がカラスにやられていた。残っているのは、ビニール袋が破られて散らばった紅茶の葉だけである。以前にも、やきそばを１カートン全部やられたこともあったので、雪をかけたり、ロープを上に乗せたりしておいたのであるが、そんな程度のものは彼等にとって、全くの問題外であったらしい。

ヒマラヤを越える渡り鳥はツルであるという。カラスではどうも色っぽさに欠ける話であるが、シェルパが云うには「カラスはチベットでは神の使いの鳥である。だから神の使いにエサをやったことになり、幸運が得られる」とのことであった。その神のお加護か、何とか食糧も工面し、荷上にも間に合わせ、３日間にわたり、11名の登頂が出来たのであった。

人間さまの記憶はどうもアイマイでいけないが、もう１つの話は1978年の９月から10月にも何度か渡り鳥を確認している。この時はダウラギリ主峰の南東稜登山である。この登山では２度の事故を起こし、４名の隊員を失うという大変な登山であった。ルートも壮絶な雪稜であった。

そんな中で雲の上を飛ぶ鳥の声を聞いたり、実際に飛んで行くのを見たりした。そのたびに「オッ、いよいよモンスーンも明けるかな？」と期待を抱き、ノートにもはっきりと記したのが10月2日である。ところがそれから、何羽くらいが、どんな編隊で飛んでいたか？という事に触れてないのである。これでは何のために渡り鳥の飛来に心を動かしたのか分らない、というものである。

その日私は、どうも体がダルいので仮Ｃ５建設に行くのをサボってＣ４でズル休みをしていた。すると鳥ならぬヘリコプターが飛んで来て南壁の下に向って行き旋回している。9月23日の雪崩遭難の３名はそのまま行方不明になってしまっていたので、事故報告に下っていた隊長が空からも捜索するために、カトマンズから乗って来たものであった。もちろん何の手掛りもつかめなかったのであるが、どうもそちらの印象の強さに負けてしまったのかも知れない。

この頃になると、Ｃ３（5,850m）あたりを境にして、上はかなり天気が良く、下は例によって朝のうちだけの晴天も10時か11時頃には毎日のように雪が降るというサイクルが繰り返されていた。このＣ３にいる時は、鳥の鳴き声を聞いただけである。かなりの数であろうことはその声から推定出来た。

6,450mのＣ４で見た時は、さらに高い高度をたくさんの鳥がカリ・ガンダキの上を飛んで来たのであるが、そのままカリ・ガンダキに泊って南下するのではなく、南東稜の下部を越え、ダウラギリ主峰の南壁の南側を通ってミャンディー・コーラの方へ飛んで行った。

この頃はそれまでと較べればたしかに天候も安定して来ており、モンスーン明けを思わせてはいたのであるが、ダウラギリの、しかもその南側という地理的、地形的関係もあるのか快晴が続くという圧倒的好天、という訳には行かなかった。そのために、完全にモンスーンが明けた、とはどうも考えにくく、「渡り鳥は晴れ間を見つけるのが上手で、好天の時だけ、サーッと飛んで行くのかな？」などと考えたものであった。

もっとも、天候が悪ければ見ることは出来ないし、そんな時、うまく自分達のいる上を通ってくれたり、ちょうどそのあたりで鳴いてでもくれれば「ああ、飛んでるな」と分るかも知れないが、そううまくも行かないだろうから渡り鳥の確認や観察も難しいことであろう。

シーズン的にも、秋の南下と春先の北上のコースは同一では無いらしいとのことであるから、ネパールヒマラヤの春の登山で渡り鳥を見るのは困難なことであるらしい。もっと心して観察せねばなるまいが、1979年秋のカモシカ同人のダウラギリ縦走隊は映画にバッチリとうつしている。興味のある方には良い資料になるのではないでしょうか。

（やぎはらくにあき・群馬ミヤマ山岳会々員）

イエティの足跡

八嶋　寛

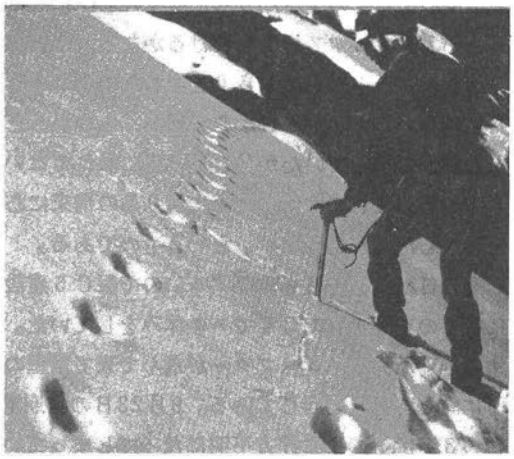
未だ幻の動物、ヒマラヤ高地に出没するらしいと云うイエティ。今までさまざまな記録はあっても、それらしき足跡の発見、または遠くに見た程度にとどまっていて、正に尻尾も出さない。

私の体験もその域を出ないものだけれども、私自身がその存在を確信するようになった足跡との出逢いを客観的事実に基づいてお話ししたいと思う。

私達は1975年、仙台山岳会によるアンナプルナサウス遠征隊として、ポストモンスーン期にアンナプルナ内院に入山した。アイスフォールを隔てて、アンナプルナ南壁と正面に対峙するサイドモレーン上、1970年のイギリス、ボニントン隊と同位置にＢＣを設置していた。その地点は、私達の隊が目標とするアンナプルナサウス北峰への主稜（ファングへと続く）に突き上げる支稜の末端になる所であった。すでに１ケ月以上の登山活動を続け、残り日数の少なくなった10月２日、Ｃ１に居た高橋隊員からのトランシーバー交信で「Ｃ１の直下に、妙な足跡がある、雪男のものかも知れない」との連絡が入った。翌朝、私達は半信半疑でＣ１へ向った。ルートは草付の大斜面から緩い岩場に移り、不安定なガレ場を乗越すと雪稜が始まる、標高5,100ｍの地点である。ＢＣより約３時間の所だ。Ｃ１の隊員はすでに降りて来て観察していた。足跡はルートとは別の下方、約100mも行けば急峻な岩場となっている地点から、緩い雪面を直線に登って来て、私達のルート付近では遊ぶ様に蛇行してから、同じ北方へ向って降りているのであった。

それは、約１日経過していたので幾分形の崩れはあったが、そのサイズは長さ約35㎝、幅は約15㎝で、歩幅は私達のよりやや広い程度だった。指先は顕著ではないが、２つ以上に分かれている様であった。また、これは写真を見て後で気付いた事だが、左右の足跡は人のそれのように平行ではなく、ほぼ一直線になっていた事であった。

また、その足跡が降り立った北側の斜面は、私達のＣ１から正面に俯瞰する事ができる訳ですが、驚くことにその斜面はアップザイレンでなければ下降不可能な程の傾斜であるのに、足跡はそのまま踵の様な点となって続き、途中で消えているのが確認できた。その消えた地点は、上からでは洞穴の様にも見えたし、単なる雪のハングの様にも見えた。そこからは、滑り落ちた様子もなく、忽然と消えていた。



私達はそこへ降り立って見たい衝動に駆られたが、残念ながらその余裕が無かった。

私の体験は以上であるが、ここで付け加えて置きたい事は、1970年のボニントン隊の報告書、「アンナプルナ南壁」の中で、マチャプチャレのベース付近で、イエティらしきものを見た事と、足跡を発見した事が、数ページに渡って、書かれていることである。

（やしまひろし・仙台山岳会々員）

野生羊（バラル）について

稲田　定重

羊は、人類により最も古く家畜化された動物でB・C 6,000年頃の北メソポタミアの遺跡にその形跡が見出せる。ただ、山羊と羊はひじょうによく似ているため壁画などでは明確に判別できない。メソポタミアの羊はその後中東・インド・アフリカ等に拡大し、人間に飼育されながら地域への順応と使用目的による育種改良により多くの品種が誕生した。羊は人類にとって極めて多くの便宜をもたらしてきた。肉・乳・脂肪・毛皮・羊毛・糞など殆んど捨てるところなく利用されてきた。特に遊牧民にとっては彼らの生活の大半を羊に頼ってきたといえる。また、羊は豚や牛などと違って特別の宗教上の位置づけがないので極めて一般的な家畜となり得たのである。

野生羊（Wild Sheep）とは

品種の改良程度による位置づけで、家畜羊（Do-meseic Sheep）に対する分け方であり、現在、40種ほど確認されている。

野生羊と家畜羊は不離の関係があり、野生羊が人間の経済的目的により改良されたのが家畜羊である。しかし、すべての野性羊が現在の家畜羊の先祖になっているわけではない。

現在の野生羊の主な分布を見ると中央アジアと北アメリカ西部で、地形的には3,000 m以上の標高で、北緯30°～45°に多く、全般的に内陸性気候の地域である。棲息環境としては必らずしも好条件ではない。しかし、野生羊はその条件に適合して、すぐれた飼料の利用性、寒さに対しては産毛性、産脂性、また、繁殖の季節性などの形質を獲得している。それらの形質は家畜羊に継承されて更に改良され、高い機能を持った品種が成立している。

その分布をみると、アジアではカスピ海から発してパミール高原・ヒマラヤ山脈・天山々脈およびモンゴルであり、極寒のシベリア・カムチャッカにも一部存在している。

現在の家畜羊はこれらの野生種のうち、Urial、Argal、Arkhar、Mouflonに発するとされている。アルガリは中央アジアに広く分布し野生羊中最大で美しい姿をしている。

野生羊は大きく5群に分類され、その一つがバラルBharalグループである。

バラル　Bharal

分布：チベットとその周辺、ヒマラヤ、コンロンなどに棲息し、夏には4,000 m～5,000 mの高所にまで移動する。ブルー・シープ、チベッタンバラルとも呼ばれる。

特徴：羊と山羊との中間的動物で、習性も中間的である。家畜羊との交配により産子を得ることはできない。体高90㎝、チベッタン・バラルは体高

雪ヒョウに襲われたバラル ▶

137㎝、体重60㎏（雄）にも達するという。

以下は私の観察メモである。

◎岩場歩きは人間より上手

険しい岩壁やガレキ地帯によく姿を見せ、人間なら三ツ道具を使わなければというような岩場でもバランスよく立ち、流れるような優美な跳躍を見せて移動する。ナンダ・デヴィの下部岩壁を青く澄んだ空をバックにスローモーションフィルムを見るように跳んでいた姿は今でも印象的である。草原地帯や小灌木帯では姿を見ることはできなかったが、糞が多量に落ちているところを見るとかっこうのエサ場になっているらしい。よく観察するとバラルの通り道があるようで、ポーター達が焼き払った小灌木帯の焼け跡をみると縦横にけもの道がついている。他にめぼしい大動物もいないので恐らく「バラル道」であろう。白骨体、角、或いは他の動物に襲われた形跡のある死体が灌木帯で発見された。

◎大敵は雪ヒョウ？

反すう動物である以上草食である。雪ヒョウにやられたばかりの死体を解剖してみたが、胃内容物は殆んど小灌木の葉であった。

人間に対する警戒心は薄いようで、好奇の目をもってじっと人間側を観察している。20ｍ位まで近寄っても逃げない。これは地域性によるものと思われ、ナンダ・デヴィ北内院という隔絶した環境にあって人間の恐しさを実感していないからであろう。（我々の入域はシプトン以来40年ぶりであった）　しかし、バラルも冬期間や積雪の多いときはエサを求めて雪線以下に移動するものと思われ、家畜羊の放牧が4,000ｍ付近まで及んでいることを考えると人間との接触は当然考えられる。

ナンダ・デヴィ内院のバラルにとって主たる外敵は雪ヒョウであるようだ。（そして、現在では恐らく人間が最大の外敵になっていると思われる）バラルの棲息エリアと雪ヒョウのそれは重なっており、雪ヒョウは敏しょう性、スピード、攻撃力においてバラルを圧倒する。雪ヒョウの食物連鎖の一端にバラルが位置していることは我々が現実に観察している。

雪ヒョウは水場の近くに隠れ住んで、水飲みに訪れるバラルを捕捉しているらしい。B•Cの近くの氷河湖のほとりにも雪ヒョウの巣が見られた。巨岩の間をうまく利用して隠れているが、強烈な動物臭がただようのでそれとわかる。我々の仲間はある日、水場近くで雪ヒョウがバラルを襲う現場に出会い、雪ヒョウを追い払って獲物を横取りしてきたものである。その晩、雪ヒョウはぶきみなうなり声を発しながらテント場の向うのモレー

ンの上をデモしていった。

◎発達した心肺機能

胸部を解剖してみるとひじょうに大きな心臓が現われ、筋肉質を呈していた。循環器系が発達しているのは、低酸素状況への順応であろう。また筋肉が発達しているのは、激しい負荷に耐えての体の敏しょう性・運動能力にすぐれていることを示している。

羊と山羊

羊と山羊には若干の形態的な相違はあるが普偏的なものではない。パミールなどによくみられるアイスベックスは山羊属に属している。

山羊は羊と同じように家畜としての古い歴史を有しているが、本来の野生は人間に飼われても消滅していない。独立心が強いのである。ちょうどネコとイヌの違いに似ている。

放牧しても羊と山羊ははっきり生態行動が異なり人間の管理外に出ようとする志向が山羊には強い。したがって、家畜山羊であっても人間の手を離れると容易に野生化する。羊は従順な代りに人間の保護を離れると滅びるという弱さがある。

現在、インドでは野生羊の捕獲は禁止されており、厳しい罰則規定がある。しかし、野生羊の跳りょうするナンダ・デヴィ内院の姿は昔日の物語になろうとしているという。

続々と入り込む登山隊やトレッカーによって楽園の秩序は乱されているらしい。ナンダ・デヴィ内院の貴重な自然を守るために最近は入域規制が厳しくなっている。

野性を守ることは登山のマナーの重要な部分である。

（いなださだしげ・ＨＡＪ専務理事）

UNITED TRAVEL SERVICE(P)Ltd.

■インドヒマラヤ全域のアレンジをすべて日本語でひきうけています。本社にも東京事務所にも日本語に堪能なスタッフが多勢おります。

■許可取得から通関、隊荷輸送、ポーターアレンジまで、遠征・トレッキングのすべてを取り扱っております。

■詳細は東京事務所のサニーまでお問合せ下さい。もちろん日本語で!!

東京事務所　〒141　東京都品川区西五反田２—23—11—202　電話 03—493 —4920

本社（デリー）　802 Nirmal Tower, 26 Barakhamba Road, New Delhi India

Phone: 46107, 42804, 43984, Telex: ND3174 Cable : YOKOSO

花を求めて(7)

水野　勉

ドラヴェが採集した大部分は大理と麗江との間および大理の北西部地域で採集されたもので、採集旅行では、かれはメコン河を渡ったことはなかった。かれ自身が揚子江の北側で植物採集をしたことはあり得ないだろう。しかし、1人の男が徹底的に踏査するには充分広い地域であり、10年間かかったとしてもけっして長いとはいえまい。それになによりもかれはまず宣教師であって、植物採集はあくまでも二次的なものだった。

1886年、雲南でペストが蔓延し、不幸にもドラヴェはペストにかかり、それ以後完全に治らなかった。1981年に休暇で中国をはなれ、ヨーロッパへ帰ったが、左腕がマヒしてしまった。

それでも、ひるまず、かれは1893年に中国へ戻り、非常に湿った、暑い土地に数カ月滞在したが病気になり、雲南府へ行き、そこで1895年12月に永眠した。ドラヴェは雲南の辺境の地に長い間住んでいたから友人はほとんどいなかった。しかし、かれの書簡はかれがいかにすぐれた観察者であったかを示してくれる。かれの採集品はすべてパリへ送られ、自然博物館で育生されたが、近代の庭園に咲く花々がいかに西部雲南に負っているかは明らかである。かれは自分の採集した花の価値をよく知っていた。ケシ、シャクナゲ、サクラソウ、ユリなどの種類の花を、ドラヴェは数多くヨーロッパに紹介したのである。

ドラヴェより少しおくれて、ポール・ギヨーム・ファルジ（1844－1912）が出現する。かれはドラヴェと同じ頃1867年に中国へやって来た。1892年まで、かれは四川省の北東部、陝西省境に近い域口に滞在していたが、植物学的業績については知られていない。宣教師として評判がよかったらしい。その辺は貧しい人々が多く、その救済に当っていた。

1892年から1903年までの間に、ファルジは約四千種を採集した。近くには大巴山があって、後年ウィルソンがそこでファルジの発見した植物の多くを採集している。この附近の丘陵地帯は北西雲南ほどには植物学的に豊富ではなかったが、種類からいうと、独立的なものが多かった。ファルジはシャクナゲの最良の種類をいくつか採集している。

1903年に重慶に移ると、病院の仕事にかかり切りになり、植物採集をあきらめた。1912年死亡。

フランス宣教師ですぐれた植物採集者のうち、最後にくるのが、ジャン・アンドレ・スリェである。かれは1886年に打箭炉にやって来た。自分の仕事である医事と伝道を別にすると、かれの唯一の関心は植物学であった。かれは打箭炉付近の山々で採集をおこなった。1891年には、チベットに近いダンゴに移ったが、それまでに、地方の方言に通じ、現地人として通るくらいであった。顔付きもモンゴル系に似て、頬骨が出ていた。ダンゴに着いてすぐ、かれは商人に変装し、チベットへ向い、徳格まで行った。このルートは殆んど知られていなかったし、高地をとおっていた。また、天候も悪く、積雪がひどかった。

少したって、かれはまたもやヤレゴンに移されたが、そこで僧侶や住民に非常に人気の的となった。かれはすぐれた外科医で、医者としての名声が周囲に拡まった。馬に乗って出かけるときは必ず胴乱（植物採集用）を携え、植物採集をした。そして、パリ植物博物館へ送った種は7,000種にものぼった。シャクナゲ、サクラソウ、ノモカリスなどで、かれの名がついたものがたくさんある。

かれは辺境に生活していたから、それほど植物標本を送るチャンスに恵まれていなかったが、そ

れでも、ヨーロッパの庭園用で重要なものを一つ紹介している。それはBuddleia variabilisというフジウツギで、この類ではフーカーも庭園用にはすばらしく美しい花だと推賞している。形の変った赤く美しい花である。

1905年の春に、その地方のラマから、中国とチベットとの間に争いが起ると知らされ、荷物をまとめ、長年にわたる採集植物を発送しようとしたが、その前に巴塘のチベット僧たちに捕えられ、15日間暴行を受け、最後には銃殺されるという悲劇的な結末となった。スリェの同僚ブルドネは毒矢で射たれ、スリェ銃殺後数カ月たってから首を切られた。かれらの後任者モンベクもまた1914年に殺された。

中国とチベットあるいは1904年のヤングハズバンド遠征によってラマの世界を乱した英国との間のトラブルは、1905年の春から初夏にかけてあちこちに拡大していった。ジョージ・フォーレストはその当時メコン河の西岸、北緯28度辺に在るツェク附近で採集をしていた。かれはフランス宣教師の長老の1人であるデュバルナール神父にたいへん助けられていた。ヤレゴンから逃げていたブルドネ神父も同行していた。かれはすぐにも逃げ出さねばならなかった。フォーレストは幸運にも逃げのびたが、デュベルナールとブルドネの2人は殺された。デュベルナールは花に興味を持ち、植物採集にあたってもフォーレストに助力していた。

園芸界にはあまり知られていないが、やはりすぐれたフランス人宣教師の1人にウルベン・フォリェ(1847－1915)がいる。かれが勤務した土地は日本およびその近辺の島である。しかし、かれが植物採集したリストをみると、その地域は台湾からサハリンまで拡がっている。もちろん、彼の主な本拠は日本であって、広く山野を歩き廻ったらしい。かれは採集旅行に出かけると、じつに徹底した植物学者であった。夜2度も起きて乾燥用の紙をとり変えることなんて何でもないように考えている人であった。1889年から1913年までに、22,500種を採集したが、それらを紹介するということを全くしなかったようで、そのため園芸界では忘れられてしまった。かれは1915年に台湾で死んだ。

最後に紹介しようというのが、アンリ・ドルレアン公である。かれもまた園芸界では殆んど知られていない。乾燥した標本を少し採集しただけで、庭園用の花を紹介しなかったからであろう。しかし、かれは有名なアジア旅行家で、2回の旅行をおこなった。しかも、それらは殆んど未踏の地域をとおっている。

アンリ公はルイ・フィリップの孫に当り、1867年に生れた。かれは21才で中央アジア探検に乗り出した。同行者にはパミール探検を経験したガブリエル・ボンヴァロおよびシベリアから加わったベルギー人宣教師ド・デケン神父がいた。シベリアから出発してラサに達しようと、かれらは天山山脈を越え、ロプ・ノールをとおってシナ・トルキスタンを横断し、トルキスタンの南に延びる山脈をのぼり、北部チベット高原を横断した。しかし、ラサまで35マイルの地点で、チベット人によってそれから先へ前進することを拒否され、東へ向うことになり、中国へ通じる公路、巴塘経由で打箭炉へと抜けた。打箭炉ではスリェ神父とA・E・プラットに出会っている。

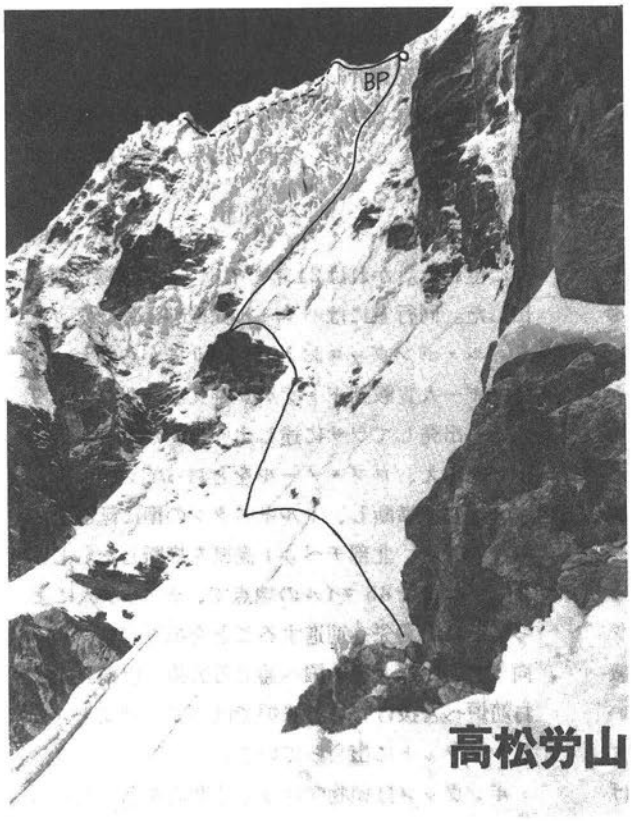
ボンヴァロは植物学には全く関心を示さなかったが、アンリ公は巴塘と打箭炉との間の旅程では咲いている花々を採集した。プラットはアンリ公からその採集植物を預かり、上海へ持っていった。アンリ公はいくつかの重要な庭園用の花々を発見した。それらはやはりケシ、サクラソウ、シャクナゲの類であった。ラテン語の学名をここに連ねることはわずらわしいのでよそう。打箭炉から、かれらは雲南府へ行き、紅河を下ってハノイへ出た。

1895年にアンリ公は第2回の旅行へ出発した。今度はルー中尉およびブリフォを連れ、ハノイから出発し、紅河をさかのぼり、南部雲南を西へ向い、メコン河に出て、そこからメコンに沿って北上し大理へ出る。そこに数週間休息してから、ふたたびメコン谷へ出て、サルウィン谷との間をジグザグに歩いた。

それからアンリ公らは雲南とビルマとの間の国境山地を越え、イラワジ川の二つ支流を渡った。

連載 6
ネパールヒマラヤ

トレッキング許可で登れる山



クスム・カングル
6369m

高松労山クスム・カングル登山隊

▲5,800mより望むクスム・カングル（実線がルート）

はじめに

「簡単な手続きで、アプローチが短く、少々手ごたえのあるヒマラヤの山を、スマートに登りたい。」と言うよくばった考えから、私達のクスムカン計画は、始まった。アプローチは4日で、4,500mの峠越えは、高度順化も兼られ、しかも、ルクラまで飛行機が使えることは、休みの1ヶ月しかとれない我々には好都合だった。

「いくらトレッキングで登れる山でも、やさしいダンゴ山やコブ山では登りがいも無いし、登るなら美しい山に登りたい。」という希望もあった。

クスム・カングルはクスムカンとも呼ばれ、エベレスト街道のルクラの飛行場からナムチェバザールにかけての道々よく眺められる。有名なタムセルクやカンテガと間違がわれることもあるようだが、それらの山と同じくドゥド・コシ側は2,000mの壁となり、この側からの登攀はかなり困難と思われる。私達は東側はもう少し登りやすいのではないかと考えた。というのは、非常に困難と思われたカンテガは、東側のカンテガ氷河より、高度順化していたとはいえ、たった3日間で登られたという例があったからである。しかし、安久一成氏のメラ・ラからの写真、名大水圏科学研究所の各方向からの航空写真から判断すると、東側イヌ・クーサイドも、ヒマラヤヒダの壁となっておりたゞ希望は、タナと呼ばれる4,356mのカルカより5,800mあたりで壁の中に消える比較的なだらかな氷河の存在であった。写真からだけ判断すると、クスムカンの可能性のあるルートは、ダグ・スコットの登った岩稜と、私達の登った南東面のヒマラヤヒダの間を登るルートと思われた。

一番やさしいと思われるこれらのルートも、登攀の部分が多いため、氷壁や岩登りの技術をある

程度身につけていないと登れないルートである。1979年9月ダグ・スコットのパーティが北峰(6,364m)に初登頂し、10月我々のパーティが第2登をはたした。主峰は1980年日本人パーティに登られた。我々の登った南東面を紹介したい。

計　　画

各係の責任分担をハッキリした為、準備の集まりは4回で、全員が集まったのは、1回だけであった。計画書も現地で使いやすいよう、英文のものを一種作っただけで、出発前の事務も簡単に済せた。ただ、5万分の1の地図と、航空写真は手に入れ、ルートについても、山学同志会カンテガ隊等経験者に電話で教えていただいた。

高所食と個人装備だけ手荷物で持ち込み、共同装備は、テントはおよばず、フィックス・ロープ、ハーケン類まで、全て現地でレンタルし、未回収のもののみ、現地価格を支払う予定にした。5人パーティーで、1名のサーダー、2名キッチンボーイを使い、出国から帰国まで、1人40万円の予定であった。結果として、思わぬルクラまで40万円余りのヘリコプター・チャーター料の出費があり、1人46万円程かかった。定期便を利用すれば、40万円足らずで全てまかなえたと思う。

カトマンズでは、中級ホテルに泊り、ほとんどホテルで食事をしての話しである。定期便、チャーターフライト共、日時はあてに出来ず、又、最近のネパール物価の高騰は、はげしいので、日程予算共、かなり余裕がほしいところである。

アプローチ

カトマンズよりキャラバンするか、ルクラまで飛行機、ヘリコプター等を利用するか、もしくはタナのBCまでヘリを利用することも考えられるが、近年ヘリは非常に高くなっている。

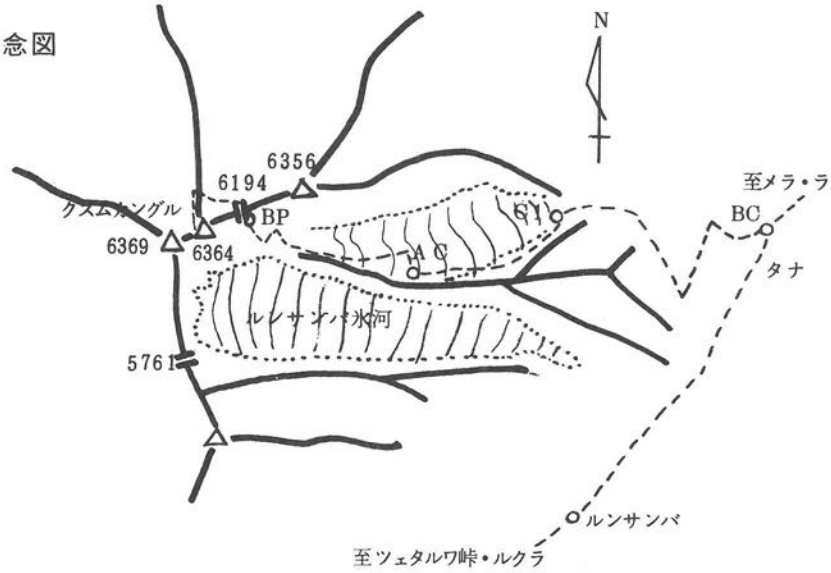
ルクラ(2,840m)よりツエタルワ峠(4,500m)を越えるのが一般的であるし、高度順化を兼ねることにもなる。初日はキューチャンガ(3,480m)あたりまでとし、翌日一気に峠を越してタントゥア(3,800m)あたりまで下るのが高度障害にかかりにくいと思われる。

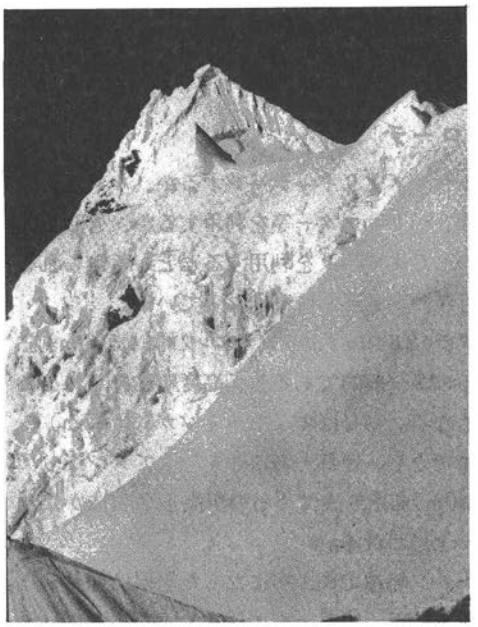
ツェタルワ峠越で高山病になった記録は多くみる。

あまり峠近くの高々度で滞在しすぎるのではないかと思う。ルクラから1、2日で4,000m以上の高度でキャンプするよりは前述した方法、あるいは、最も安全策をとろうとすれば、チューチャンガもしくは、手前のトグディンマ(3,420m)をベースに、2～3日順化してから越えれば良いだろう。

ツェタルワ峠は、10月中旬以後は雪となるので雪に強いポーターを使う必要がある。道添いにはカルカしかなく、手に入るものはない、ただ放牧民からチーズやミルク、ジャガイモは手に入るかもしれないがあてにはできない。

概念図





6194コルよりクスムカングル（右・北峰、左奥・主峰）

キャラバン中の泊場は岩小屋やカルカがあるので、１０人までのパーティーであればテントを使用しなくても、タナまでは入れる。カルカの石垣にシートをかぶせても良い泊場になる。ルクラで、小屋使用やジャガイモを掘る約束をしておけば、ベースハウスとして利用でき、又、最高にうまいタナの小粒なジャガイモを利用でき、ポーターの節約にもなる。タナまでは蒔が使える。

私達はチューチャンガ、タントゥワ、コテ、タナと４日間のキャラバンでＢ・Ｃ入りした。３日にすることも可能だが少々厳しい。帰りは３日で十分である。

ル　ー　ト

クスムカン南東壁に取付くには、ピーター・ヒラリーのニュージランド隊が登った（彼らは頂稜１ピッチ下で敗退した）ルンサンバ氷河経由か、もしくは我々のとった、ルンサンバ氷河の北にある氷河に入るルートがある。タナ（4,356m）から我々のルートは4,500mあたりまでは、大きく山腹をジグザグに登る放牧用の道である。それより左右のモレーンが出合う最底コル4,880mめざして登る。その向うには、干あがった氷河湖があり、水も流れていて良いキャンプサイトになる。これより上は向って左のモレーンを登るが、このモレーンは大きな5,271mの岩峰に続いている。この岩峰の手前を右に巻いて、岩峰右のコルをめざす。コルよりはじめてルンサンバ氷河をみおろすことが出来る。

雪稜を登ると小さな岩場にぶつかる、この岩のバンドを左に巻きながら上に越せば、又雪稜となり高度5,400mにある150m程の高さの横に長い岩壁の下に出る。このあたりのシュルントは雪のブロックで側壁を作れば、７～８人用の立派な雪洞となる（私達がＡＣとした所である）これより岩にそって少し下りぎみに、岩壁の右はじ近くまでトラバースすれば、この岩壁の弱点である１５ｍほどのルンゼに出る。このルンゼを越えれば、傾斜のゆるい岩づたいに100m程の雪の急斜面の下に至る。この雪面を直登すれば、あとは5,800ｍまで、クレバスにだけ注意すれば技術的には問題なく行ける。5,800ｍ地点より6,194ｍの頂稜上のコルからルンサンバ氷河に下りているルンゼをめざして１つ雪稜を越え、大きくトラバースする。斜度４５～５０度で部分的に氷もありいやらしく感じる。ルンゼを直登すれば300ｍで頂稜に出るが、ルンゼ上部は斜度６０度で垂壁もあり氷は硬く緊張する所である。

6,194mのコルより３ピッチ程で、北稜とにはさまれたプラトーに至り、どこにでもビバークできる。頂上へは北稜をたどる。雪庇の続く北峰から主峰までは、我々は歩いていないが、見た所それ程難しくなさそうである。５名の全員登頂を目的としていたので時間的に正午であったが北峰までとした。

私達は1,000m程フィックスを使用したが、アルパインスタイルで登ればスッキリしたものとなろう。ただ高度順化の上下や登頂後の下りのことを考えると、かなり厳しいと思う。高度順化をメラ・ピークあたりでやるのも手であろう。

メンバーは、アンデス、ヒマラヤ等の経験者２名、その他３名で、１名は冬山経験も不充分であったが、仕事上常に山歩きをしていた体力とフィックスとで、彼を含めて全員登頂できたものと思う。ルクラより行きのキャラバン４日、登山期間１３日、帰りのキャラバン３日であった。

（文責：金沢　健）

寸　感

編集部辞任にあたって

角田不二

先代の編集長、沖允人氏からこの仕事を引き継いでちょうど2年が経過した。沖氏といえばＨＡＪの専務理事も歴任しており、私にとっては大先輩にあたる人だ。交代したばかりの頃は「ずいぶんと若輩に代わったものだ」と思われた方も少なくなかったことと思う。それでもなんとかやってこれたのは、周囲の理解と暖かい協力があったからである。快く原稿執筆を引き受けていただいた人、歯に衣着せずに意見を言ってくれた人、時には校正や使い走りを手伝ってもらった人、さらには遠征中の留守を預ってくれた人。みんな私にとってはありがたい方ばかりで、いくらお礼を言っても言いすぎはないと思っている。私はその援助の上に乗っかって、独断と偏見に満ちた私独自の編集方針を貫かせてもらった。「時代の要請」「ＨＡＪ会員の最大公約数的要請」と、この二つは常に意識していた。が、常に納得できるものが出せたとはいえない。

今、私は少なくとも一年間、この仕事から退かせてもらおうとしている。一年間日本を留守にしなければならないためである。理由はともあれ、中途半端なところで退くことにある種のうしろめたさは感じている。お世話になった方や愛読して下さっている方たちに申し訳ないという思いもある。しかし、何によらず雑誌の編集というのは、一人の人間があまり長くやるのは好ましくないとも思っている。特に本誌のように担当者が一人しかいないような場合はなおさらである。公共性は意識していてもそこは人間のこと、知らず知らず誌面が己れのカラーに染ってしまうものである。ここでまた違う人間の手に触れられれば、そこにカクテルができあがり、新しい世界が開けてくる筈である。一年たってまた日本に帰ってきた時、ＨＡＪの「ヒマラヤ」がどんな「ヒマラヤ」になっているか、今から楽しみでもある。「ヒマラヤ」が私の「ヒマラヤ」でなくなっても、「ヒマラヤ」の歴史のひとコマにまがりなりにも私が存在することができたということは、幸運なことであったと言わざるを得ない。

ＨＡＪには私などよりも有能な人材はいくらでもいる。私などがいなくても「ヒマラヤ」は間違いなく発展を続ける筈である。

今後の「ヒマラヤ」に大いなる期待を寄せつつ、ひとまず退かせてもらいます。長い間ほんとうにありがとうございました。

事務局日誌　（1月）

5(月)事務局業務開始
7(水)カンチェンジュンガ隊片岡隊員出発
8(木)S・クマール氏（シカールトラベル）来室
10(土)「ヒマラヤ」№111刊
16(金)報道機関と打合せ（稲田）
21(水)事務局打合せ（稲田、山森、角田）
29(木)カンチェンジュンガ隊壮行会（於池袋・東方会館）

昭和56年2月10日印刷　56年3月1日発行
発行人　柴田金之助
編集人　角田不二
発行所　日本ヒマラヤ協会
〒160　東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

原稿募集

ニュース　ヒマラヤ（中央アジア含む）各地の社会情勢、現地事情（入山事情）、登山隊の動勢など。

紀行　遠征、旅、トレッキング……ヒマラヤとそれをとり囲む地域のものであれば、何でも結構です。採用分には粗品を進呈致します。

日本からヒマラヤから　ヒマラヤからの便り、ヒマラヤについて日頃思っていること、ＨＡＪや編集部に対する提言などもお寄せ下さい。

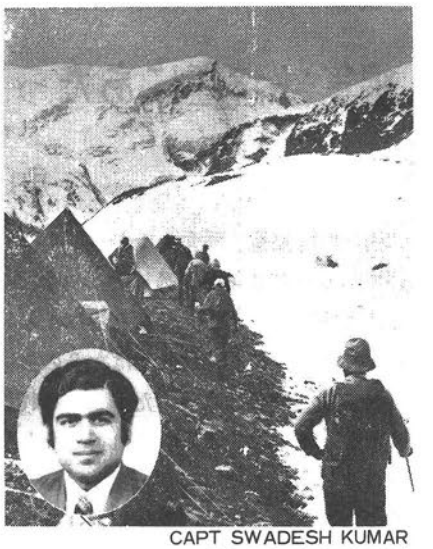
◎送り先〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1-506 日本ヒマラヤ協会「ヒマラヤ」編集部

Shikhar Travels

—— シカール・トラベル ——

"魅惑の
インド・ヒマラヤ"

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール・・・・・
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



CAPT SWADESH KUMAR
(MANAGING DIRECTOR)

Shikhar TRAVELS PRIVATE LIMITED
1,701, Nirmal towers,
26 barakhamba road new delhi-110001
tel. 42555, 42666 telex 031-4364 SHIK IN Cable SHIKHE
Branch office:Gangtok
Camp office:Joshimath & Uttarkashi

AFIA 全世界のネットワーク

AFIA ホーム 保険会社

海外 山岳保険

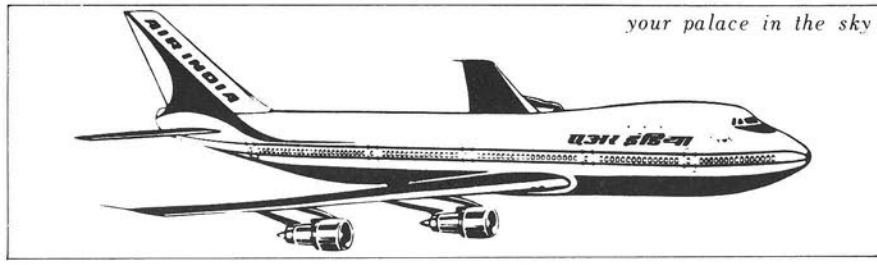
取扱代理店
郷インシュランス・コンサルタント
〔ホーム保険会社代理店〕
〒100 千代田区丸ノ内3－1－11
国際ビル8F
TEL. 03—281—2981

相談所
ホーム保険会社首都圏支店
〒100 千代田区丸ノ内3－1－1
国際ビル8F
TEL. 03—211—4401
担当：寄木康男

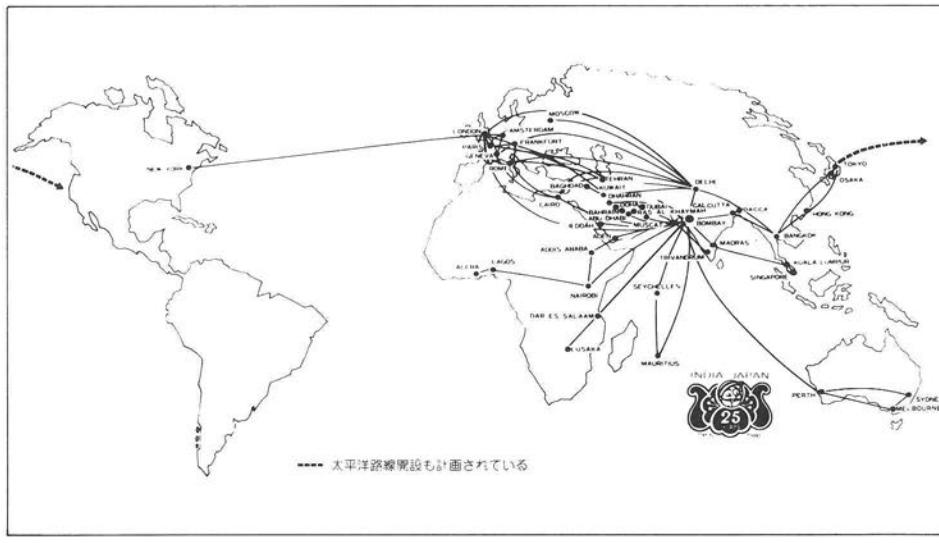
ヒマラヤへの装備

◎遠征隊の装備、相談にのります。

- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町 2 — 2 — 3 ☎03 (208) 6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿 1 —16— 7 ☎03 (346) 0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2 — 8 —14☎03 (264) 5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2 — 8 — 6 ☎03 (264) 8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町 2 —123☎0486 (41) 5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105☎0273 (27) 2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保 2 —19—10東和ビル内☎03 (200) 7219



AIR-INDIA ROUTE MAP



ヒマラヤとアルプスへの登山は、名古屋の秤井(HAJ会員)まで、お問い合わせ下さい。

名古屋●中村区名駅四丁目7－35ホテルニューナゴヤ 747号室 〒450☎(052)583－0747

世界の43都市をネットする

エア・インディア

東　京●千代田区有楽町日比谷パークビル　〒100☎(03)214-7631
横　浜●中区常磐1－2関内日本ビル　〒231☎(045)651-2874
大　阪●東区備後町松豊ビル　〒541☎(06)264-1781
神　戸●葺合区布引2－1－3新布引ビル　〒651☎(078)222-1919
福　岡●博多区博多駅前1－3－21八重州ビル　〒812☎(092)471-7172

昭和五十一年五月第三種郵便物認可　月刊「ヒマラヤ」三月号　昭和五十六年三月一日発行　通巻百十二号　発行　日本ヒマラヤ協会　定価五百円